

日蓮聖人と虚空蔵菩薩に関する研究

—— 先行研究を中心として ——

坂 詰 秀 正

一、はじめに

日蓮聖人は、承久四（一二二二）年、安房国長狭郡東条郷の片海に誕生し、天福元（一二三三）年、十二歳の時に清澄に入山し、道善房に師事して十六歳の時に出家された。そして、聖人は当時の仏教界、さらには社会の動向について多くの疑問を持たれた。^① すなわち、当時の仏教界にあつては、八宗・十宗に分かれて、釈尊の真実の教えが不鮮明となつていた。また、世間においては、承久の乱を境として鎌倉幕府が日本を支配することとなり、朝廷の威信が喪失するという状況であつた。

このような、仏法と世法に対して疑問を抱かれた聖人は、清澄寺に安置されている虚空蔵菩薩の御宝前において「日本第一の智者と成し給え」と願を立てられ、それらの疑問を解決すべき「仏智」を求められたのである。

鈴木一成氏の『日蓮聖人正傳』には、聖人の虚空蔵菩薩に対する立願とその宗教体験について「純信無垢なる幼き求道者の祈は通じて智慧の寶珠は授けられた^②」とあるように、このことは聖人の生涯において重要な出来事であるといえよう。

また、中尾堯先生の『日蓮』に、「清澄山での日蓮は、天台密教の行法によつたのであろうか、虚空蔵菩薩信仰のもとで神秘体験を積んだ^③。」とあり、聖人は、清澄寺において、虚空蔵菩薩に日本第一の智者となしたまふと願を立て、仏智を授かるという宗教体験をしたともある。そもそも、若き日蓮聖人が「日本第一の智者」を求めにあらたてて願を立てられた虚空蔵菩薩とは、サンスクリット語では、阿迦舍藥婆、Akasagarbha（アーカーシャガルバ）といい、虚空がすべてを蔵するように、無量の知恵と福德を備えているという意で、虚空蔵菩薩は、

人々にこれらを与え、願いを満たし救うという菩薩であるとされる。

その意味について、『大日經疏』卷十一では、次のようにその菩薩の力用を説いている。

如下 虚空^{クナルカ}不可^カ破壊^ス一切無^{キカ}能勝^{クル}者^ニ故名^ニ虚空等^ニ
力^ト又藏者^ト如下^ハ人有^ハ大寶藏^ニ施^シ所欲者^ニ自在^ニ
取^{リテ}之^ヲ不^レ受^ケ貧乏^ヲ如來虚空之藏^モ亦復^タ如是^シ一
切利樂衆生事皆從^レ中出^デ無量法寶 自在^ニ受用^{シテ}而無^シ
窮竭^ト相^ト名^ニ虚空藏^ト也⁽⁴⁾

つまり、虚空藏菩薩と名付けられる由縁は、虚空は破壊されることなく、一切は虚空より勝るものはなく、また、藏とは、人に大宝藏があつて欲する者に施すように、この菩薩は無量の法の宝を流出して衆生を利樂するのでこの名前がつけられたとされる。

そして、この虚空藏菩薩の形相は、蓮華座に坐して、五仏冠をいただき、右手に劍を持つて、劍に光焰があり、左手は腰の側にして蓮華を持ち、その上に宝珠があるとされる。所持の宝と劍とは福智二門を表しており、この宝珠と劍を持つことから虚空藏菩薩は福德と智慧の菩薩とされる。

さらに、その他の経軌により種々な形像があり、その

中で、虚空藏菩薩を本尊として仏智を求める修法に、「虚空藏菩薩求聞持法」があり、虚空藏菩薩に種々の供物をそなえ、虚空藏菩薩の咒を誦し、頭腦の明晰と記憶力の増大を得る、いうなれば学力増進を祈念する修法の本尊もある。

この虚空藏菩薩に日蓮聖人は、日本第一の智者と願を立てられ、その真摯な祈りの結果、智慧の宝珠を得て、各地を遊学されたのち、一切経をひもとき、八宗・十宗の勝劣を見極め「一代五時」、つまりは釈尊の御心は法華經にこそあるのであると体得された。そして、聖人は、釈尊の正しい教えである法華經を世に広めるべく立教開宗をされ、幕府に『立正安国論』を執筆し、上奏した。その後の聖人の生涯は、数度の法難に遭いながらも、末法の人々のため、法華經弘通のため尽力されたことはいうまでもない。

このように、聖人の生涯の中で、虚空藏菩薩に願を立てられたということは、聖人の仏弟子としてのすべての始まりであつたと考えられる。

では、日蓮聖人との関連において、この虚空藏菩薩が明治時代以降どのような研究がなされてきているのか、確認したい。そのことを通じて、従来、求道期における

仏弟子としての日蓮聖人の虚空蔵菩薩への立願、あるいは聖人が修行された清澄寺の宗教的環境がどのようなものであったのかを整理しておきたいと思う。

二、先行研究概観

まず、日蓮聖人と虚空蔵菩薩に関係する研究を安房国の清澄寺、あるいは日蓮聖人の虚空蔵菩薩への立願に関してたずねてみると、以下の七本を抽出できる。

- (1) 清水龍山稿「清澄寺宗旨考」⁵⁾
- (2) 山川智応稿「日蓮聖人の発心立願の時期を論ず」⁶⁾
- (3) 山川智応稿「清澄寺宗旨の変遷とその寺格地位を考ふ」⁷⁾
- (4) 塩田義遜稿「清澄寺草創考」⁸⁾
- (5) 塩田義遜稿「日蓮聖人の虚空蔵菩薩祈誓に就て」⁹⁾
- (6) 高木 豊稿「安房国清澄寺宗派考」¹⁰⁾
- (7) 窪田哲正稿「安房清澄山求聞持法行者の系譜」¹¹⁾

以上、これら七本の論文は、その内容から次の三つに分けることができる。

- 【A】：(1) (3) (4) (6) (7)
- 【B】：(2)
- 【C】：(5)

まず、【A】の五本は、日蓮聖人が清澄寺入山当時において清澄寺の宗派が天台宗か、真言宗かという、清澄寺の宗旨に関する研究が中心となっている。

ついで、【B】の論文は、日蓮聖人が虚空蔵菩薩に対して発心立願した時期についての研究である。

さらに、【C】の論文は、日蓮聖人が祈りを献げた虚空蔵菩薩に対して、祈りの意味と、その行法について研究されている。

では、これら三つに分けた七本の論文を、【A】【B】【C】の順でその内容をたどってみると、以下のようなところがある。

A、日蓮聖人出家における清澄寺の宗派

周知のとおり、昭和二十四年に日蓮宗に改宗するまで清澄寺は、新義真言宗に属していた。そこで、明治時代まで聖人出家当時においても清澄寺が真言宗と考えられていたが、天台宗ではないかという考えが論じられている。

【A】の(1)の清水氏の論文は、日蓮聖人が、入山された当時の清澄寺の宗派についての検証である。その視点は、聖人が真言宗を破折されている表記に着目し、

分類することに重点がおかれている。その結果、以下の六点から、聖人当時の清澄寺宗派は台密の流れを汲む天台宗であるとの結論を説かれている。その根拠は、以下の六点である。

i 『戒体即身成仏義』は理同事勝、顕劣密勝の台密義であったということ。

ii 『清澄寺大衆中』に、真言の疏に限り「真言の疏」とあり、『止観』等については「天台の」とことわられていないこと。

iii 『報恩抄』では、慈覚、智証、恵心等の天台諸師をもっぱら破折されていること。そのことは、聖人自ら正統天台を継承する者としての御自覚に立脚されているということ。

iv 『善無畏三蔵抄』には道善房の阿弥陀信仰を記していることによって、清澄寺は天台宗の浄土信仰が伝承されていたと考えられていること。

v 清澄寺が東寺真言宗に所属していたとするならば、日蓮聖人はまず高野に行くべきであるのに、比叡山に遊学されているということ。

vi 日蓮宗の機関紙『日蓮宗教報』に日蓮聖人の乳人滝口氏についての論があり、そこには、滝口氏の

菩提寺、西蓮寺、今の妙蓮寺が天台宗であると指摘され、師である道善房はこの西蓮寺から清澄へ移ったとの伝承があるということ。

このような点から清水氏は、清澄寺は天台宗であったと結論づけられている。

ついで、(3)の論文において山川氏は、清水氏の結論が清澄寺は天台宗の寺院であったとの指摘に賛同し、さらに次の三点を補強し、清澄寺が天台宗寺院であると結論付けられている。

i 『種々御振舞抄』には清澄の円智房が三年間法華経を書写し、また五十年間にわたり「一日一夜に二部」の読誦を続けたとあり、如法経書写は慈覚大師を始めとするものであるから、この法華経書写は、東寺流の真言の行法とはいえないということ。

ii 遺文に挙げられる清澄の房名は、「円智房、実智房、観智房、浄円房」等で円字が多く、密の字のついたものが一つもないこと。このことは、真言宗より、天台宗に親しみの多い房号であるというところ。

iii 日蓮聖人滅後のち、先師によって聖人伝が著作さ

れていく中で、聖人仮託の書とされる『法華本門宗要鈔』に、聖人は、師である道善房より真言を習ったということが記述されている。つまり、この『法華本門宗要鈔』が著作された当時には、清澄寺が真言宗に所属していたことが推測される。

このことにより、聖人伝は、清澄寺の所属は真言宗であるという記述になっているということ。

以上の三点を清水氏の論文に補強し、清澄寺が天台宗の寺院であったとしている。

(4)の塩田氏の論文は、先の清水・山川氏の結論を肯定し、聖人遺文を再確認している。また、清澄寺が不思議法師の開創で、慈覚大師による中興開山であることや虚空蔵菩薩と求聞持法についてを歴史的な考察を加え、清澄寺は天台宗であるとしている。

(6)の高木氏の論文では、清水・山川氏の論を概観し、賛同している。さらに、高木氏は、早稲田大学の荻野三七彦氏による日蓮聖人と同時代の清澄寺求聞持法行者、寂澄の「納経札」の研究を挙げている。そして、寂澄書写本を神奈川県立金沢文庫研究の識語編から検討を加えて、(1)(3)(4)の論文に賛同している。

(7)の窪田氏は、(1)(3)(4)(6)の論文を要

約し、再検討を加え、聖人入山当時は台密の寺院に属していたということが決して決定的ではないとしている。それは、従来の(1)(3)(4)(6)の論文で否定しようとしていた東密の信仰が清澄寺には濃厚であったことからである。しかし、この東密の信仰があったということだけで真言宗であった、と断定することはできないとして、窪田氏は、聖人入山当時の清澄寺は天台宗、台密寺院であったが、そこには宗派を超えた虚空蔵菩薩信仰・求聞持法の霊場であったのではないかと結論付けている。

以上、聖人入山当時の清澄寺の宗派について研究されている五本の内容を確認した。そのことから、清澄寺は天台宗に属しながらも虚空蔵菩薩を本尊とする求聞持法の行者の霊地であったと考えられる。

B、日蓮聖人の立願の時期

【B】の論文は、日蓮聖人が虚空蔵菩薩に発心立願した時期について論じており、聖人遺文により、従来、十六、十八歳以降の発心とする中、延山録外写本の『破良観等御書』に十二歳という記述があることに注目している。そこで、山川氏は、宗教心理学による考察を参照し、

幼少期というのは、十二歳から十五歳頃という結果から、聖人の虚空蔵菩薩への発心立願とは十二歳の清澄寺入山当時から持たれていたのであると結論付けている。

C、日蓮聖人と虚空蔵菩薩

【C】の塩田氏の「日蓮聖人の虚空蔵菩薩祈誓に就て」の論文は、日蓮聖人が虚空蔵菩薩に祈りを献げた意義について論じている。すなわち、聖人遺文の『善無畏三蔵抄』、『清澄寺大衆中』、『破良観等御書』を挙げて「日本第一の智者と成し給え」と願を立てられたことは、聖人の世法、仏法に対する疑問の答えを求めるための仏智を得ようと、虚空蔵菩薩に祈誓したとしている。

また、塩田氏は、行学院日朝の写本の『妙法比丘尼御返事』の以下の文を引用して、虚空蔵菩薩に立願したことを強調してる。

幼少より名号を唱候し程に、いささかの事ありて、此事を疑し故に一の願をおこす。日本国に渡れる処の仏経並に菩薩の論と人師の釈を習見候はばや。又俱舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗・真言宗・法華天台宗と申宗どもあまた有ときく上に、禅宗・浄土宗と申宗も候なり。此等の宗々枝葉をば

こまかに習はずとも、所詮肝要を知る身とならばやと思し故に、(後略)¹²⁾

この『妙法比丘尼御返事』から、「一の願」とは、聖人が、幼少の頃より、諸宗の教義の疑問に対して虚空蔵菩薩に、「日本第一の智者と成し給え」と願を立てられたことであると考えを強調している。

そして、清澄寺が台密寺院であったことから、密教において仏智を求める行法は、虚空蔵求聞持法であるとして、聖人もこの求聞持法を修したという立場を顕している。

三、むすびにかえて

以上のように、【A】、日蓮聖人が清澄寺入山当時において清澄寺の宗派が天台宗か、真言宗かという、清澄寺の宗旨に関する研究、【B】、日蓮聖人が虚空蔵菩薩に対して発心立願した時期についての研究、【C】、日蓮聖人が祈りを献げた虚空蔵菩薩に対して、祈りの意味と、その行法について研究、以上、三項目七本の日蓮聖人と虚空蔵菩薩の先行研究の概観をたどったが、日蓮聖人と虚空蔵菩薩の関係を直接的に論じているのは、【C】の塩田氏だけであり、聖人の求道期における、虚空蔵菩薩と

の関連における研究はあまりなされていないといえよう。しかしながら、虚空蔵菩薩という存在は、求道期における聖人として、聖人の仏教者としての歩みを考える中で重要な菩薩であったと理解できるといえる。そのことから今後の課題として、日蓮聖人の伝記では、どのように聖人の求道期が記されているのか、改めて考察を加えねばならないであろう。

註

(1) 『報恩抄』には、以下の通りにある。

「かくのごとく存て、父母・師匠等に随ずして仏法をうかがひし程に、一代聖教をさとるべき明鏡十あり。所謂る俱舍・成実・律宗・法相・三論・真言・華嚴・浄土・禅宗・天台法華宗なり。此の十宗を明師として一切経の心をしるべし。(中略) いかんがせんと疑ところに、一の願を立て。我れ八宗十宗に随はじ。天台大師の専ら経文を師として一代の勝劣をかんがへしごとく、一切経を開きみるに、涅槃経と申経に云、依法不依人等「云云」。依法と申は一切経、不依人と申は仏を除き奉て外の普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸人師なり。此経に又云、依了義経不依不了義経等「云云」。此経に指ところ了義経と申は法

華経、不了義経と申は華嚴経・大日経・涅槃経等の已今当の一切経なり。されば仏の遺言を信するならば、専ら法華経を明鏡として一切経の心をばしるべきか。」(昭和定本一一九四頁)

ここでは、聖人が仏法と世法の疑問に対して、父母や師匠などの意思に従わず、釈尊御一代の聖教をもととして、一切経を開きみたところ、法華経こそが釈尊の御心を知る最も尊い教えであると悟られたということが確認できる。

(2) 鈴木一成著『日蓮聖人正傳』(十九頁)

(3) 中尾 堯著『日蓮』(吉川弘文館、平成十三年) 三十六

頁

(4) 『大日経疏』(『大正藏経』三十九卷六九七頁a)

(5) 清水龍山稿「清澄寺宗旨考」(『双椶学報』創刊号、明治三十七年)

(6) 山川智応稿「日蓮聖人の発心立願の時期を論ず」(『日蓮聖人研究』一卷、昭和四年)

(7) 山川智応稿「清澄寺宗旨の変遷とその寺格地位を考ふ」

(『日蓮聖人研究』第一卷、昭和四年)

(8) 塩田義遜稿「清澄寺草創考」(『棲神』第二十号、昭和十年)

(9) 塩田義遜稿「日蓮聖人の虚空蔵菩薩祈誓に就て」(『法華』第二十七卷三号、法華会、昭和十五年)

(10) 高木 豊稿「安房国清澄寺宗派考」(中村瑞隆博士古稀記念論集『仏教学論集』昭和六十年)

- (11) 窪田哲正稿「安房清澄山求聞持法行者の系譜」(『日蓮教學研究所紀要』第二十号、平成五年)
- (12) 『妙法比丘尼御返事』(昭和定本一五五三頁)